小学校における教師の実践　～児童理解を深めるために～

講師 教員養成支援室：竹内　直美専門主事、藤田　路乃専門主事
総合教育センター：中村　友彦主任指導主事

塾生レポートから

全体会で「一人一人の楽しい、できた、分かった、を見つける」ことの大切さを理解し、大きな学びとなりました。「自分だけ楽しいのではなく、一人一人が楽しいを実感する」という言葉が今も心に残っています。それは子ども達に寄り添っているからこそ感じることができるものだと考えました。児童一人一人には個性があり、どれも尊重されるべきものです。一人一人をしっかりと見て、個性が輝く授業づくり、クラスづくりを行っていきたいです。

分散会では「一人一人を徹底的に大切にする教育」を達成するためにはどうしたらよいのかについて考えました。そのためには、児童に大切に思っていることを伝える、保護者と連携し子ども達一人一人の育ってきた背景を知る等、様々な意見が出ました。中でも「朝に一人一人と話しコンタクトをとる」方法が、今の私たちでも実践することができると考えました。具体的には、朝教室に行き児童に挨拶をした後、「眠そうやね。昨日何時に寝た？」「今日の給食楽しみやね！」等、一人一人と話す時間を設け、児童の体調や気分を知ることです。児童とコミュニケーションをとるきっかけづくりにもなり、一人一人と向き合うことができます。これからは実地研修や教育実習が始まります。一日のスタートは児童との会話から始めていくようにしたいです。

また、私は居場所づくりのため、ことばを大切にした教育を行っていきたいと考えました。「ありがとう。」「ごめんなさい。」などの気持ちを素直に伝え合うことができる学級を作っていきます。子ども達同士の関わりから居場所づくりへと広げていきます。そしてクラスの仲間だけではなく、給食の際に調理員さんに「ごちそうさまでした！カレー美味しかったです！」、登下校の安全を見守ってくださっている地域の方に「おはようございます！」と積極的に人と関わることができる子どもを育てたいです。そのためには、まず自分ができるようにならなければなりません。「相手に伝える」ことを意識し、相手に応じた伝え方、話し方を徹底していきます。私は自分の意見や気持ちを相手に伝えることが課題です。遠慮して相手に気を使いすぎて、上手く思いを伝えることができません。「相手に伝わる＝スタート」をキーワードに、相手を尊重しながらも自分の気持ちを一つ入れて話すことを徹底していきます。

学校に行くのが楽しい。そんな学級づくりができるといいですね。一人一人の楽しい、できたを見つけ実現させたいです。個性が輝くクラス作り、素晴らしいですね。その輝きをみんなで認め合うことで、次はみんなが輝くクラスになります。朝の会話。是非実践してください。教室で子どもを迎え「おはよう」と声をかけてください。「おはよう」が返ってくれば○さらに返ってくれば◎　黙っている、下を向くなど気にかかる様子の子にまず声をかけたいですね。挨拶で色々な人とつながれる子どもも育てたいです。クラス作りの思いをどう子どもに伝えるか？年度初めの所信表明が要です。想像するだけでワクワク、ドキドキ！ですね。　～レポート担当スタッフからのコメント～

中学校における教師の実践　～生徒理解を深めるために～

講師　教員養成支援室：太田　勝専門主事、中村　季弘専門主事
総合教育センター：岩本　信吾指導主事

塾生レポートから

今回の講義では、中学校の教育現場で教師が実践していくべきことについて学んだ。

私が話を聞いて印象に残ったことは、日常の目、対話や繋がりの大切さである。教師が放課後に巡回を行い教室を整えることで机の落書きや写真の悪戯があった場合、そこから問題の種を見出していけると学び、「日常の目」が、子どもが表に出さない内側の部分に気づいていくためにとても重要であると感じた。私が教師になった時には見えない部分に気づく非認知能力を養っていくためにも毎日、授業中や放課後、部活の時間といったそれぞれに合ったタイミングでクラス全員と１日１回話したり、ちょっとした良い部分を見つけて本人に声掛けをし、褒めることを徹底したいと思った。子どもたちの何気ない行動や些細な変化が大きなサインであることを頭に置いて接していく必要があると強く感じ、日頃から自分だけではなく保護者や周りの先生も巻き込んで情報を収集していくことが大切だと思った。今までの講義の中で出てきた「ほうれんそう」の重要さも再認識する機会となった。

また、講義を受けて教師と生徒の繋がりはもちろんだが、生徒同士の繋がりの大切さに気づかされた。今までは、教師がどれだけ生徒の心の中に踏み込んでいけるかということばかり考えていたが、子ども同士が教え合い、助け合っていくことは授業の活性化や自信にも繋がり、教師が教えること以上の学びが生まれていくと感じた。この環境を作っていくためにも、授業の中で積極的にグループワークを導入するなどの工夫を行い、子どもが「やりたい」と思う気持ちにフォーカスし、主体的に取り組める授業を行っていきたいと思った。

分散会で思春期真っ只中の子どもたちは、１つ対応を間違えると反発があったり、カッとなることもあると学んだが、日々１対１で会話する時間を取り、保護者にもプラスの面で連絡をするなど、様々な方向からフォローしていくことが中学校の教師の役目であると感じた。また、講義を受けて教師の言い方１つで子どもたちのやる気を引き出すことも削ぐことも出来てしまうため、心を引き上げられる言葉遣いも学んでいく必要があると感じた。

日常から様々なヒントを見つけ、子どもの成長を支えられる教師になりたいと強く思った。

子どもたちの何気ない行動や些細な変化に敏感でありたいという思いが伝わってきます。だからこそ「日常に芽があり、日常に目が必要」なことを、自分の強みや自分にできる関わりのタイミングで、具現化してしてくれることに期待しています。後半には子ども同士の関係性が、学びの環境につながることへの気づきが表現されています。子どもが「やりたい」と思う気持ちにフォーカスするというのは、素敵なキーワードですね。共感的人間関係を育成し、自己存在感や自己決定の場を与えられるような集団作り、学級経営を理想として、これからも塾での学びが進められるといいですね。

～レポート担当スタッフからのコメント～

小学校

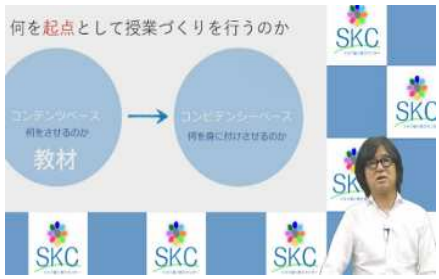
中学校

補講

第４回特別講座
「主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり 」
講師；総合教育センター　東良　雅人　指導室長

第４回は総合教育センターの東良雅人先生による、「授業づくり」をテーマにした講座でした。東良先生はお話しの冒頭で、急激に変化するこれからの社会「Society5.0 超スマート社会」において、子どもたちに未来の社会を生きる力を育む必要があると述べられ、そのためには、知識を暗記して再生するだけではなく、経験や体験と結び付けて考える力、「生きて働く知識として活用する力」が重要であると説かれました。また、「主体的・対話的で深い学び」は、授業改善に向けた重要な視点であり、「どのように教えるか」ではなく「どのように学ばせるか」に重点を置き、「何を身に付けさせるのか」という育成する資質・能力を軸とした授業づくりが求められていると解説されました。まず、主体的な学びとしては、「どのように教えるか」を軸とした授業では教材に重点が置かれ結果重視の授業となるが、「どのように学ばせるか」を軸とした授業では、学びの過程に焦点を当てた子ども主体の授業が展開でき、主体的な学びにつながると説明されました。

次に対話的な学びとしては、対話の必然性や自己の考えを広げ深めることができる「問いの質」を高めるとともに、自己との対話も重要であること、深い学びとしては、各教科の特性に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連づけ、情報を精査して考えを形成する、問題を見い出して解決策を考える、といった学びの過程の中で深まるものであることを説明されました。



第５回特別講座
「小学校における授業づくりのポイント（国語科）」
講師；総合教育センター　吉田　夏紀　副主任指導主事

第５回は、総合教育センターの吉田先生に「小学校における授業づくりのポイント」について講義をいただきました。授業づくりで重要なことは、各教科の見方・考え方を働かせて、「子どもたちに教材を教えること」を目的にするのではなく、「教材を通して目標とする資質・能力を育成する」という考え方が重要であることを説かれました。

その上で、各教科の単元において育成する資質・能力を意識した学習指導案の作成方法等について、具体的な教材を示しながら解説されました。

単元を構想する上では、指導計画が子どもの課題解決の過程と一致するように工夫することが重要であり、そのためには「子どもたちはどんな考えや疑問をもつか」や「いつ・どのような指導を行い、どのように評価するのか」をあらかじめ見通して丁寧に検討する必要があると説明されました。また、１単位時間の展開としては、「資質・能力の育成につながる学習活動」や「思考や判断を促す発問」の具現化が必要であり、「何のための活動であるか、指示だけの学習になっていないか」を意識するとともに、発問を考える際には「予想される子どもの反応」を想定し、必要な支援についても十分に検討しておく必要があると話されました。板書計画については、授業が終わった時にどのような板書が完成しているかを想定し、子どもの意見を整理し具体的に記載すると分かりやすい板書になる、と説明されました。これから、学習指導案を作成し模擬授業を行う際には、今回の講義内容をぜひ参考にしてください。